

空



2008年

SORA 22号

晴
夜
②②
—
3

柴
田
佐
知
子

崇
る
て
ふ
塚
は
小
さ
し
山
桜

朧
夜
の
父
に
補
聴
器
贈
り
け
り

春潮の端に碇を下ろしけり

荒灘の塩を買ひたる夏はじめ

刺すこともできる笄夏の月

雷光や崇りて神に列せらる

ひたすらの高さにありぬ巢立鳥

蓬葺き八方に山せり上がる

倒立 小林朱夏

玄海の風は気紛れ鯉幟

鳩胸の女足早夏兆す

我先に飛び込んでゆく海開き

倒立のよろけて雲の峰潰す

炎天や四股名を刻む力石

ごきかぶり奈落の口を出入りせり

夏がすみ塩壺のみをつくる窯

兜虫つがいにされて売られをり

夏休み最後の日まで叱られて

馬耳東風母は涼しく生きてをり

・忙しい・

毎日、毎日、忙しい。

腹がすくのでご飯を食べる。

着替えをするので洗濯機をまわす。

挨拶が目につくので、掃く、拭く。

新聞はその日のうちに読みたい。

テレビで一緒にと言われ、体操をする。

天気が良いと出臍が痒く。どこらに俳句の

種がないかと卑しい根性で出掛けてみたり。

一日の疲れを風呂で流す。

眠たくなったら「おやすみなさい」。夜更

しの翌日は昼寝が必須。

日常の多忙に加え、最近はとみに年をとる

のに忙しい。

夜叉 苑 実 耶

テーブル・フォー・ツー

花吹雪く菩薩も夜叉も身の内に
仰ぎつつ桜の大樹廻りけり
裾まくる足の並びし磯開き
梅雨晴れ間子の靴が鳴るきゅつきゅつきゅつ
新緑のまつただ中に橋揺るる
ブーメラン独り占めせる青野かな
夏雲やたて笛吹きつつ下校せり
青田風座敷を通り抜けにけり
眠る子の汗を拭きけり共に寝て
五月晴鰻絵にありし鶴と亀

米国人作家サム・レベンソンの詩「時の試練をへた人生の知恵」の一節「魅力的な唇のためには、優しい言葉を口にしないさい。愛らしい瞳を持ちたいなら、他人の良いところを探しなさい」「ほつそりした体を保ちたいならば、おなかをすかした人に食べ物に分けてあげなさい」

オードリー・ヘップバーンはこの詩が好きだった。彼女は晩年、ユニセフ親善大使として飢餓や病気に苦しむ子供たちのために力を注いだ。

日本発の国際児童貢献活動「テーブル・フォー・ツー」もこの言葉の実践と言える。一つの食事を途上国の見知らぬ子どもと分かち合うという意味で「二人の食卓」と呼ぶ。

低カロリーのメニューを選べば、食事代の一部が国連の世界食糧計画に寄付され、アフリカなどの学校給食費にあてられる。

「毎日新聞より」

目に見えないものは信じない性分だが、「点滴石を穿つ」という。偶っことで小さな努力をしていけば、どこかで大きな力になるのかもしれない、と思った。

桜

高倉恵美子

・最後の同窓会・

花の冷え人の恋しくなりにけり
昼月や水たつぷりと茄子植うる

余生とは人それぞれや春耕す

待つことの長き病院ヒヤシンス

生き残り今日も桜の下にゐる

年寄りの話つぎはぎ鳥雲に

鶏当番うさぎ当番春休み

薬や村に一人の入学児

筍を配るに米糠つけにけり

春耕の泥もつけずに戻りけり

最近、小学校時代の友の死の便りや病気の噂を耳にするようになり、もう一度会いたいと急に同窓会を思いたち故郷の温泉で集うことになった。

電話連絡では是非にと言っていたのに出席者は八名だった。出席者が少ないのはやはり寂しい。誰もが何かしら病気を持っていて膝が悪い、腰が痛いと言いながら話は続く。耳の遠い友もおり、その友に話の調子を合わせる。八十を過ぎると自分も含めてそんなものかどつくづく思う。子供も定年を迎え曾孫も居ると言う。近況報告、子供の頃の思い出など一日中話しても尽きない。今、ここで会えたことが幸せだとお互いに納得した一日だった。

これが最後でなく又会える日が来ることを願いながら別れた。まだ自分で愛車を駆ってさっそうと帰って行く友もいる。

順路

樋口みのぶ

韋駄天の聡き毗春を待つ
裏白に水音かすかや寺の道
鰓張りて魚の釣らるる猫柳
母逝きて張りの失せたる雛かな
玄海の紺を力に若布刈る
順路また神へ近づく桜かな
これよりは長崎街道花の冷
鉄棒をくるりと回り卒業す
ドーナツの穴を抜きをり花の昼
聡き目の馬をなでゐる夏はじめ

鶯が人に慣れるとは思つてもみななかった。我が家の庭には春になると、名も知らない鳥も含め、七、八種の鳥が来る。その中の一羽が、夕方頃まで庭にいて、庭仕事で動く度に、すぐ側の枝で遊んでいる。ご飯粒やパン屑を撒くのだが、雀に混じって、その鳥も啄んでいる。目白とは違つし、まさか鶯じゃないよねと、話していたら、いつからかケキヨと鳴き出した。鶯なのだ。すぐ傍までやってきて餌を啄んでいたが、いつしか主人と私の手に乗って食べる程になった。時には膝に乗ったりもして撒き餌が日課となり、生活のハリとなった。そして鶯の声は日ごとに整つていった。それは別れの日が近いという事であった。

四月中旬のある朝、姿を見せたきり、鶯は来なくなつた。他の鳥達と山へ戻つたのだらう。母が逝き、空しい日々を送つていた私に神が至福の時を与えてくれたのだらうと、ふと思つた。

山笑ふ 青山悠

うららかや大国主の大袋
 咳ひとつ点滴壘を揺らしけり
 誰彼の大きく見ゆる新社員
 つちふるや千畳岩の忘れ潮
 打つほどに退る木魚や山笑ふ
 巢立鳥吉良の墓域のつつましき
 山吹や男の子にできし目玉焼
 一族の最年長となりて夏
 玄海の真青なる日や袋掛
 夏草を食み肉牛として育つ

・福間の又ゼー・

私には三人の弟がおり、末の弟がまた「おとうさん」と言えず、「おとうしゃん」と呼んでいた頃のことである。夕食を済ますと庭に置かれた涼み台で、その「おとうしゃん」から「福間の又ゼー」の話聞くのが子供たちの楽しみであった。ふるさとの夜空は広く、星はこぼれんばかりに輝いていた。

馬方の「又ゼー」は、縦横の機知で狐から閻魔様まで騙したという福岡県宗像地方の民話のヒーローであった。金持ちや、弱い者いじめの馬喰をこらしめた話など、人々にひとときの笑いや活気を与えた。青草を燻した蚊遣の匂いの中で聞いた狐と又ゼーの騙し合いなどは、またあらためて書いてみたいとおもっている。

福岡駅から西へ十五分ほど歩くと、左側の草むらに「宗雲道中居士」と刻まれた又ゼーの墓石が今も残っている。

どんたく 秋 千 晴

角丸くなりし鞆や卒業す

投げ返すボール春泥付きしまま

白魚の酸素袋に値の付きし

母と剥く豌豆ひよいと飛んで来し

どんたくの人出も雲も沸き立ちぬ

繰り言の返事も繰り言花蘇芳

枱席の座布団柄も夏に入る

採り忘れし梅の大きく色づきぬ

白南風や洗ひたる犬ブルブルン

負けし子に拍手大きく運動会

・還暦・

茶道を再開して二十七年になる。

六名の方とは公私共にお付き合いをしている。八十二歳から六十九歳になられる、皆、お姉さま方で、私のことを娘や妹のよう可愛がってください。お互いに、茶道のこともさることながら、家族のことも含めて、喜びや悲しみも励ましあってきた。「友達がいるから続けられた」と各々、痛感してきた。

一方、私より、十七歳から八歳年下の三名の方とも親しくしている。娘のように、妹のように、可愛らしく思っている。

茶道道歌の「師は親、同門は兄弟」を実感し、茶掛が読めるようになってきたことを嬉しく思う還暦である。

青嵐

あさなが捷

これよりは距離ちぢまらず夕桜
手折らうとしてぎしぎしに拒まるる

青嵐砕きて骨を撒けといふ

ほろほろとみんな去りゆく桐の花

菱形の黄色い口や燕の子

麦秋や古道に抜くる通学路

土すこし浮かせ筍山なりし

白百合や新婦ははいと答へたる

筍の笹に盛られて民陶祭

炎天に圧されて影の縮みけり

・指摘・

句会で「季語のつき過ぎ」と共に注意されるのが「言い過ぎと説明」です。

師柴田佐知子は指導する際、旧かなづかいの誤用や文法のあやまりなどはきちんと言いますが、採る句・採らない句でくくり、ほとんど句に手を加えたり変えたりすることはないので、たまに指摘されると本当に目が覚める思いがします。

以前、放浪記の舞台を観て作った「しあはせじやないのねと毛布掛けられし」の、「と」が説明になっっていて、いい過ぎとの指摘はスツと心に入ってくるものでした。かくて、私の中でのお気に入り

しあはせじやないのね毛布掛けられし 捷
が誕生しました。